

千屋城跡



昭和59年3月

高知県南国市教育委員会

序

千屋城跡はその殆んどが水田化し、一部土壘状遺構が南国市指定の史跡となっています。

城主千屋氏は細川守護代の管下にあって二千貫の支配者であり戦国時代になって森・国沢・蚊居田氏と共に上佐の四家と称せられ上佐七守護につぐ豪族でした。のち長宗我部氏に仕え有力給人となったのですが、前浜伊都多神社の棟札に千屋三郎左衛門菅原貞亮とあり菅原氏の後裔といわれています。

こうした歴史をもつ千屋城跡は「高知空港周辺整備事業に伴う共同利用施設改築工事」として城跡内にある下田村公民館が改築されることとなり、緊急発掘調査の必要にせまられ岡本健児先生（高知女子大教授）に御指導をお願いし、昭和58年8月3日から11日まで実施しました。調査に当っては岡本健児先生と共に宅間一之先生（高知県教育委員会文化振興課社会教育主事）・高知大学考古学研究会員並に地元関係者の皆さんのご協力をいただきました。

炎天下連日の発掘調査がつづけられお蔭様で多くの成果を得ることができました。深くお礼を申しあげます。

報告書の刊行にあたっては宅間一之先生の全面的なご援助をいただきました。心から感謝申しますと共にこの報告書が今後城跡保存の参考文献として活用され次代につたえる貴重な資料となることを念じております。

昭和59年3月31日

南国市教育長 鈴江廣幸

I はじめに

この調査は、南国市下田村公民館建替え工事に伴う緊急発掘調査であり、南国市教育委員会が主体となって、昭和58年8月3日から11日にかけて実施したものである。

調査にあたっては、岡本健児（高知女子大学教授）と宅間一之（高知県教育委員会文化振興課社会教育主事）が担当し、松村信博、中島恒次郎、高橋慎一、多田勝重（高知大学考古学研究会）が補助し、南国市空港対策課の協力も得た。また報告書作成にあたっては、岡本健児先生の御教示をうけ、田中哲雄、武田勝両氏の御協力も得て、宅間一之があたった。



高知空港拡張工事開始前の下田村地区

II 城跡の概要

1



千屋城周辺図

調査地は、南国市前浜2355番地に所在する中世城跡「千屋城跡」内である。

千屋城は国人千屋氏の居城とされているが、千屋氏の系譜や歴史は明確ではない。天授4年（1370）細川頼益が土佐守護代として上田村に入部してから、細川氏の被官となり、

図2



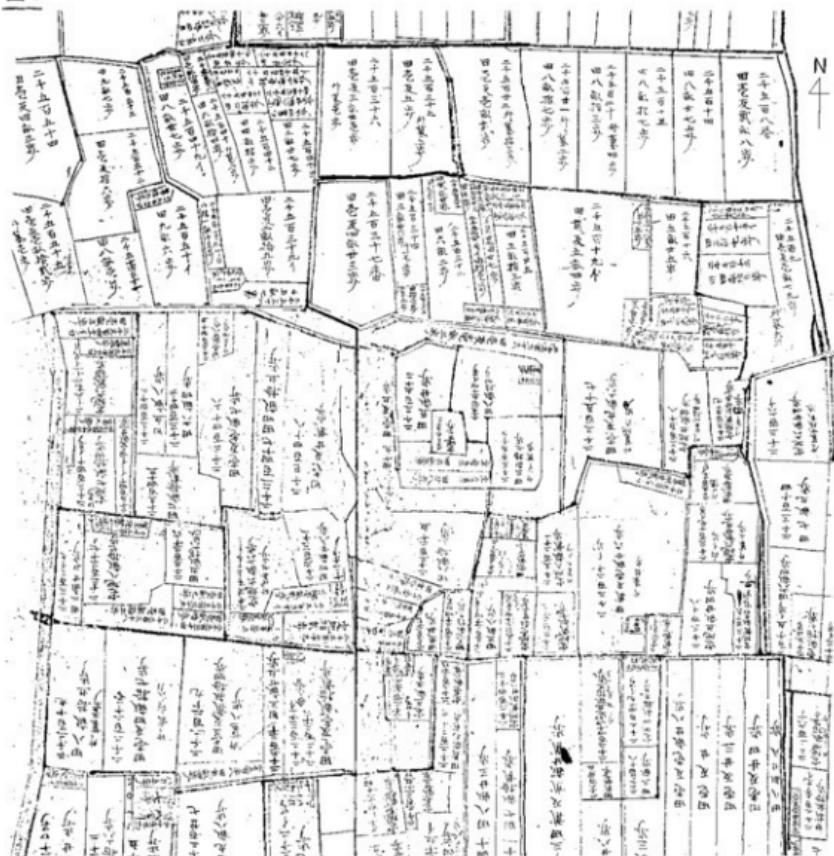
千屋城跡概要図

名主の土豪としての立場を容認されて以来、永正4年（1507）細川氏が帰京するまでは行動を共にしたと伝えられる。

大永7年（1527）上田村に所在する伊都多神社再建棟札では、千屋道春が顕主となっていることから、当時なお千屋氏の勢力は存続していたことがうかがえる。

長宗我部国親の勢力拡大期の千屋城主は千屋貞堯（さだたか）と伝えられる。文武両道に秀れた貞堯ではあったが、国親の戦力には抗しきれずその配下となる。天正元年（1573）伊都多神社宝殿上葺の棟札には、大垣那秦元親、千屋貞堯、千屋勝久らの名をみることができる。貞堯に次ぐ城主は千屋紋太夫（文太夫）となる。

図3



千屋城跡周辺地籍図

『地検帳』では、

ツメヤシキ

一、 壱反四代 ヤシキ荒 同（下田村）城 田村新左衛門扣
内十代作メ 同し（弘岡分）

とあり、『南路志』には、

千箭古城 古城記云千屋紋太夫居之

とある。

千屋城は外側を墨濠に囲まれた4町歩余の面積であり、文太夫は下田村だけでも10町歩の給地、扣地を保有しており、その勢力はうかがうことができる。慶長5年の関ヶ原の戦における盛親の敗北と山内入国以来の千屋氏については不明である。

図2・3 写真1

千屋城の詰には、現在八幡小祠が鎮座している。この部分を中心に約7～9m幅の壠状地形が卷いていることは、地籍図でも現況の地形図でも判読することができる。現状はすべて水田であるが、周辺の水田より僅かながら低いのも堀を推考するには適当な条件である。この地形を内堀と理解すれば、東西55m、南北50m、面積は3,700m²の詰の面積を考えねばならない。

詰部分は壠状地形部より10～20cm高く、更に中央部の八幡小祠の所在する部分は1mほど高く約250m²の平坦部で、そこには祠や墓が所在する。この台状地形は詰部分のほぼ中央部に位置し、八幡社の所在地としてはやや不適当な場所かも知れないが、現状地形となった時期や動機については全く不明である。

写真1



写真 2



写真 3



写真 2・3

内堀状地形の最も良好に残存するのは北堀部分である。幅は東部で9.2m、中央部分で8m、西端部は道や側溝で破壊され計測は意味がないかも知れないが現況は8m幅である。この堀状地形の北は一段高くなり、上墨の残丘と考えられる地形がある。東端部では堀状地形部との比高1.1～1.2mを測り、幅約6mで25mほど堀状地形に沿って東西方向にのびる。この地形は一たん中央部で16.8mにわたってきれ、水田化されているが、再びカマボコ状の土堤状地形となって西に弧を描いて22mほどのびる。

写真4・5

北西隅部の土堤状地形である。東端は水田の水路で仕切られ、幅3.5m、ゆるやかに弧状にカーブし、西にいくにつれ狭く西端部では1mほどになる。南下段の堀部分との比高は約1.2m、北水田との比高は50cm内外のカマボコ状土盛である。堀内側のカーブはすでに道路や側溝によって破壊されてはいるが、東部との関連から考えれば、やはり8m幅でここまでのでび、ほとんど同幅で丸く南へ折れているものと推定することができる。中央部分で計測すれば全長70mである。

写真4



写真5

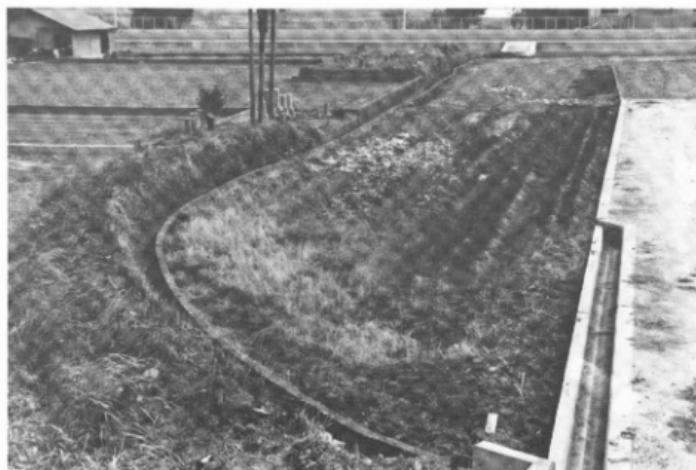


写真 6

東堀部分の地形も比較的良好に残存する。南部では幅10.2m、北部で9mとやや北が狭ばまっている。詰部の畠地部分や、東隣の狭幅水田との比高も僅かに低い。全長は中央部分で計測すれば約60m、周辺には壘状残丘などは全くなく、東隣の水田との境は土盛畦畔のみである。

写真 6



写真 7

南堀部分は、北・東部に比してやや景観を損ねている。その中央部分を南北方向に道が貫き、東半分についてもすでに東西方向に幅4mにわたって道と側溝が整備されている。従って堀と推定される部分の残存は7m前後の幅となっている。西方についても耕地は整備され、セメント畦畔となり、堀状遺構としての計測はやや自信はないが、現況では幅13mで、全長は中央部分の計測で約65mである。

写真 7



写真 8

西堀部分も南堀部分同様セメントによる畦畔となり、計測値は適当でないかも知れないが、北方の弧を描いてカーブする土堤状地形を見とおせば、幅10~10.5m、全長は中央部分の計測で65mである。

写真 8



図 4 写真 9・10・11・12・13

県道土居五台線に沿って東西方向に残丘が所在する。千屋城外堀の内岸として昭和45年2月南国市は史跡に指定している。残丘上に野見嶺南の碑や墓が点在する。

この土壠は東西方向18.4m、水路等約1.2m隔て更に西に6mのびている。ただこの6m部分は、全て墓地であり、僅かの比高しかなく土壠址の延長として良いかは疑問も残る。

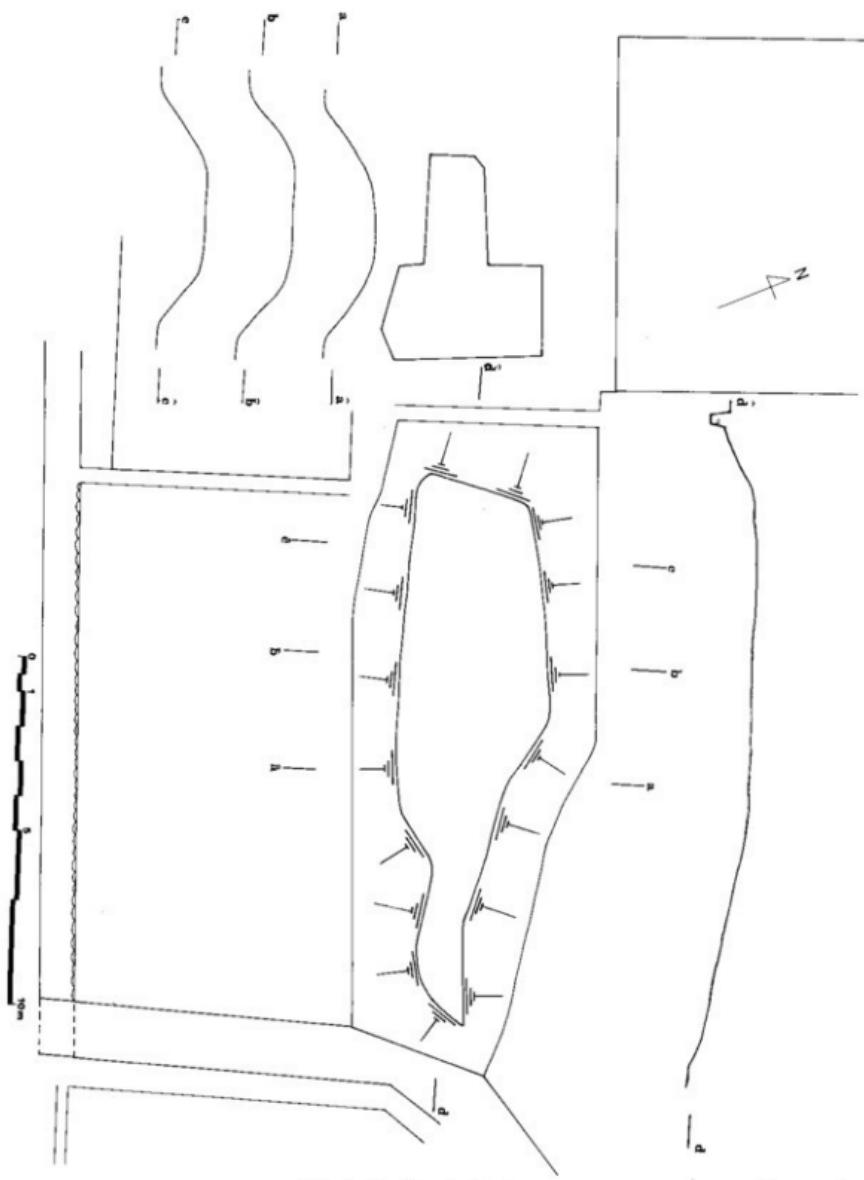
土壠の南北はともに耕地化され、南部はほとんど直線的に削られ整地されている。北部は西方がやや広がる。土壠は東部から徐々に高まり、中央部分では周辺水田面とは約1.5mの比高となる。この付近およそ5mにわたって平坦となりそこに墓がある。また西方には樹木もあり、北面裾部には河原石の積石などもあり土壠の旧態は崩されている。

土壠の裾部幅は東端で4.2m、中央部分では7mと広くなり、そのまま西端まで続いている。

また土壠南側については県道・側溝まで9.5m幅の耕地がある。この地形はあるいは県道側溝をも含んで外堀の存在を考えて良いものではなかろうか。

またこの残丘より東方100m、県道土佐山田前浜線を越えた民家の中には、かつてはこれに類似した土壠状地形が存在したと云われている。空港整備事業によってすでに消滅しているがあるいはそれらも関連をもった土壠の一部と考えて良いものではなかろうか。

4



南土壁跡実測図

写真 9

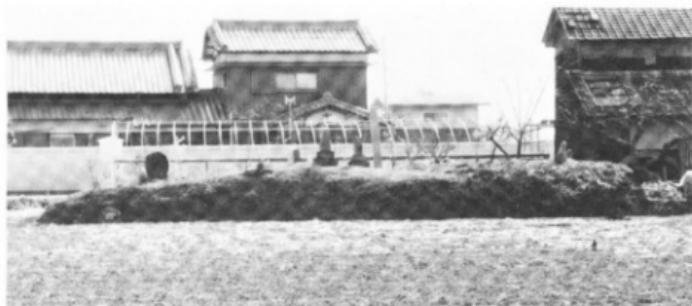


写真 10



写真 11



写真12



写真13



写真14



写真14・15

県道上佐山田前浜線の東側、千屋城跡の北東部に「ヤカシロ」あるいは「ヤカシロ田」とよばれる水田があり、かつその水田中に「ヤカシロ」と呼称される小丘がある。円錐形の小丘で径 6m、高さ 2.3m で頂上に小祠がある。伝承では射場から矢を放った的名残とされているあるいは千屋城北辺の土壘の残丘の一部であるかも知れない。これより東方約25m にも幅3mで東西方向に26m、約80m²の竹林の壘状地形がある。この付近まで千屋城の外堀土壘の延長を推考するのは無理であろうか。そこから南を望む現況地形からしてもここまで推考は可能ではないかと思われる。空港周辺整備事業に伴う調査によってこの線上に壘状遺構が確認されていることもあり、千屋城跡の北限は竹林からヤガシロの小丘をへて、さらに県道を越えて西方100mの地点までのび、そこから南に折れたのではなかろうか。現況地形や、部分的な発掘調査からもその感を強くする。

現在千屋城跡周辺は、三ノ戸・本吉のホノギとなっているが、地検帳では、ネリキトヤシキ・寺カ内ヤシキ 本堂ノ前 本堂寺々中、庄主寺中 マサヤシキ ツメヤシキ 弓場ヤシキ ヲトリ所 土るヤシキ 東キト 政所内などのホノギがあり、また土地では射場、ヤカシラ 北ノヤシキ ウシロヤシキ フルヤシキ 寺マエ 寺ヶ内など城跡と関連をもつホノギの所在も明確にされている。

写真15



III 調査の概要

図5 写真16・17・18

城跡の中心部に所在する八幡小祠の東隣である。戦後建てられた木造公民館の老朽化と、空港周辺整備事業の一環としての建て替えである。

公民館の所在する地点は、城跡詰の東南隅部にあたり、公民館の東の畠地には小祠や墓が点在した。調査は公民館の敷地と、この畠地をふくめ300m²を対象とし、調査方法は遺跡の性格からして最初から全面発掘を実施した。

写真16



写真17



写真18



図5

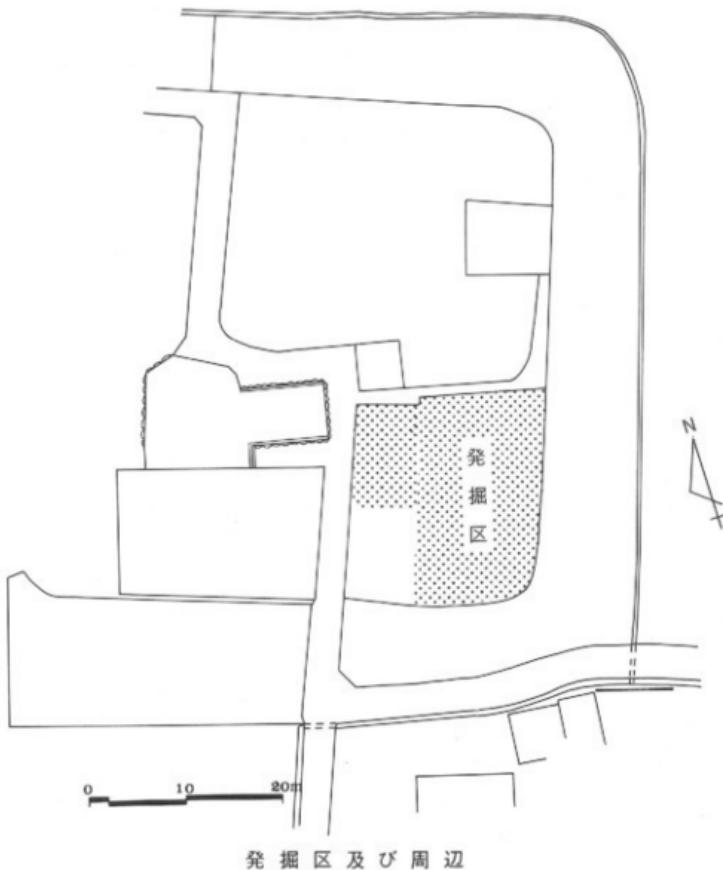


写真19

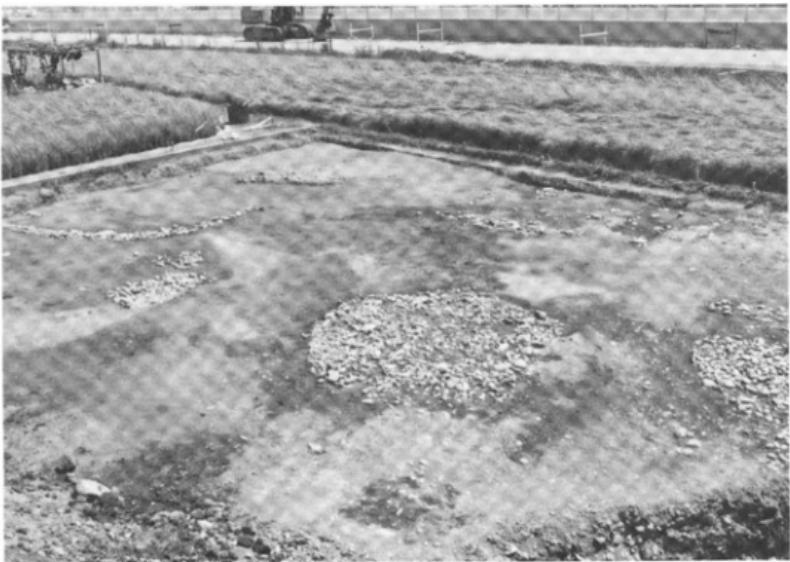
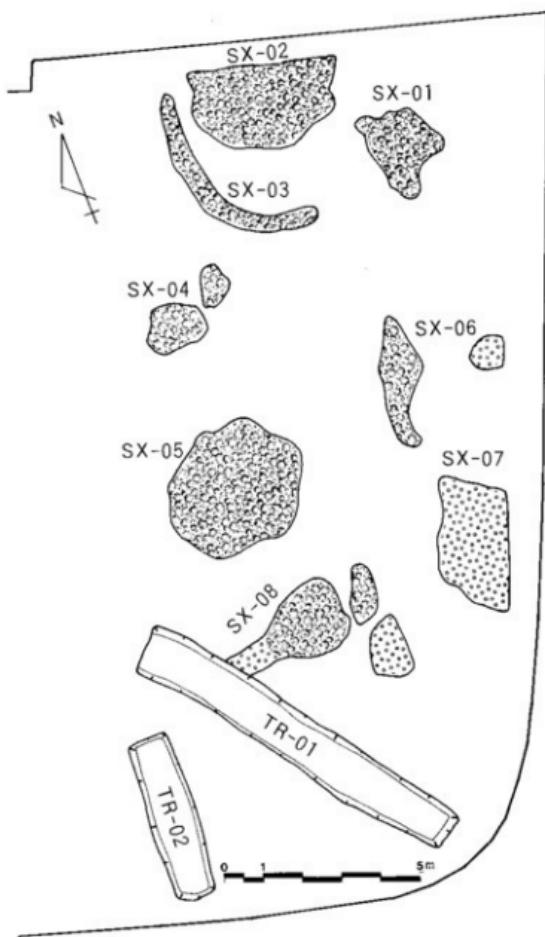


写真20



図 6



集石遺構検出状況

図 6 写真19・20

耕作土下の床土の上面、
黄灰褐色砂質土に混じって
2~7cm大の河原石の散在
が目立った。その層を掘り
すすむなかで、拳大から人
頭大の河原石の集中した部
分を検出した。河原石の集
中状況は石列状のもの、円
形のもの、楕円状のもの、
散在するものなど様々であ
り、8ヶ所にわたってその
集中地点を確認した。

図 6 写真21

発掘区北東部より検出し
た不整形の石群で約4m²で
ある (SX-01)。石の密集
度も薄く、石間には黒茶褐
色の砂質土を多く含んだ一
層の石群である。石群中に
は土師質土器の極小片や近
代の瓦片など若干混在する。
石群を除去すれば石群の存
在しない他の地点と同レベ
ルの平坦面となる。

写真21

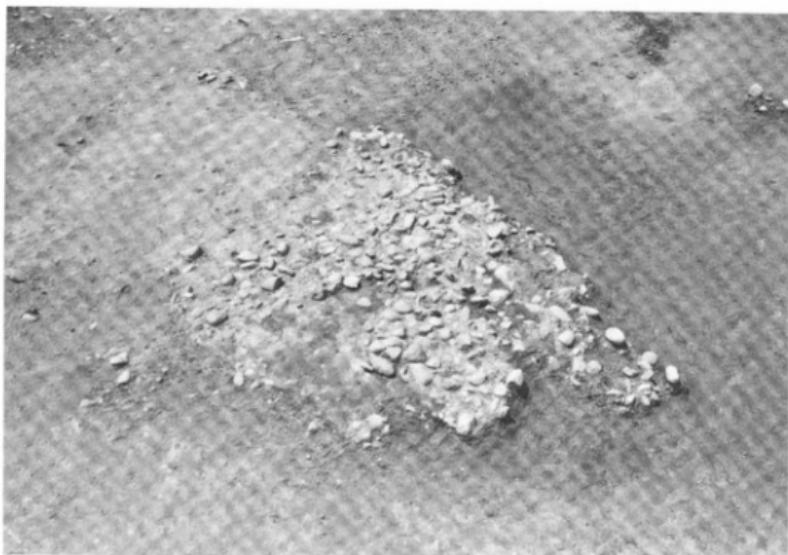


図6・7 写真22・23・24

他の石群と同レベルでは30個前後の石が約1m²範囲内で確認されたのみである。この石群とは別に、黒茶褐色で直径3.5m、半円は調査区外へのびる円形プランを検出した。この黒茶褐色土を10~15cm除去すると、黒茶褐色砂質土と河原石の約20~30cmにわたる混合層を検出した。この石群はバンクセクションの観察によればややレンズ状を呈しているが完全な石群ではなく、黒茶褐色砂質土の中に河原石が混入した様相を呈している(SX-02)。

発掘区北端壁部にも、バンクセクションと同様の石群層を観察することができる。黒茶褐色砂質土を除去した完掘状態は、径3.8m、深さ45~50cmの土壌状遺構となる。東壁から南にかけてはほとんど垂直にたちあがるが、西壁部にはやや起伏があり、北限は土壌中央部よりゆるく傾斜してたちあがる(SX-02)。

写真22



写真23

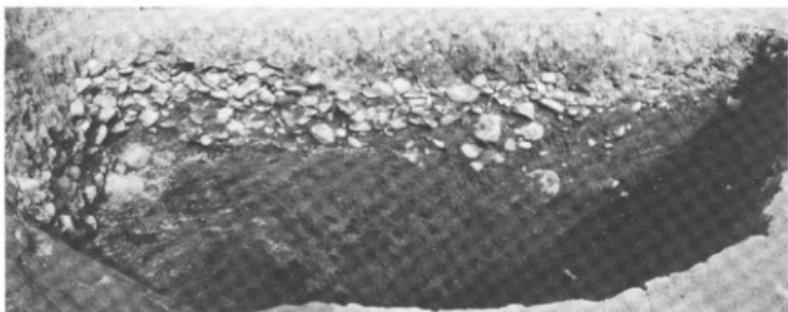


写真24



図 6・7・8 写真25・26・27・28

SX-02の石群に接する弧状(三ヶ月状)石列である(SX-03)。北端部に三角状の大きめの割石を配し、そこから約5.5mにわたって弧状(三ヶ月状)にのびている。幅は北部が50

写真25

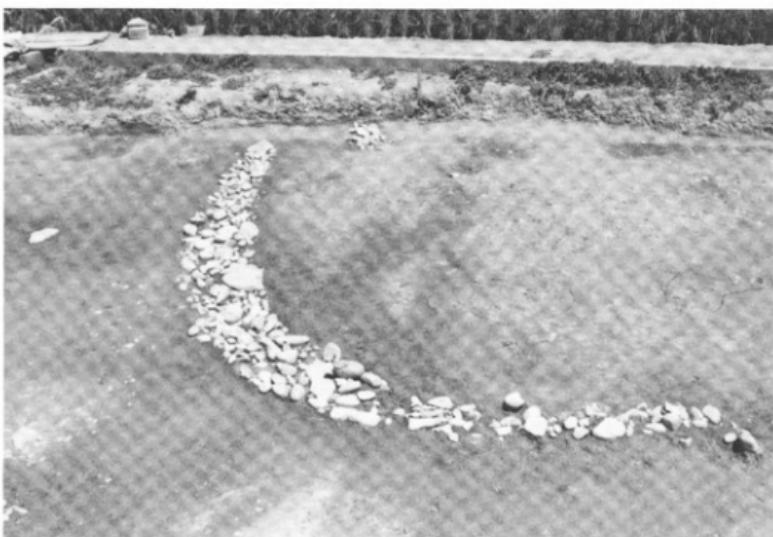
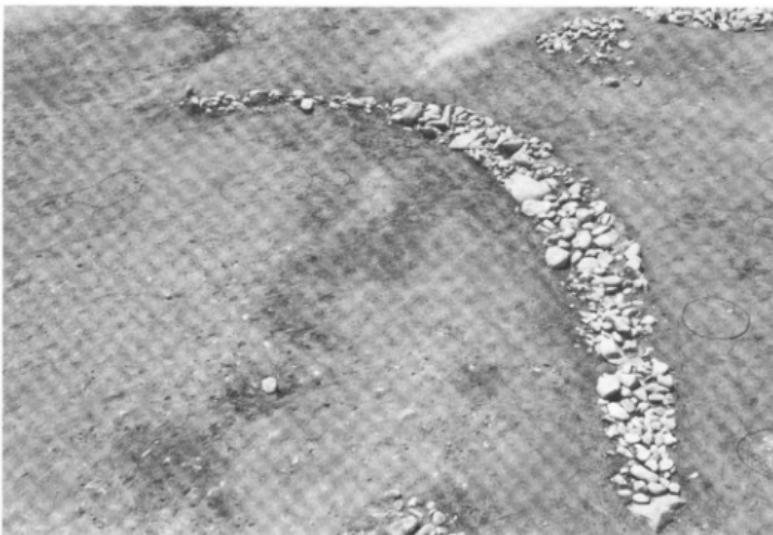


写真26



cm、中央部が70cmとややふくらみ、南端は30cmと狭くなっている。石群は拳大かそれよりやや大きめの石を中心に1～2段程度に重ね、それ以下は黒茶褐色砂質土が多量となり石も2cm大のものとなる。石を除去しての完掘状態は、長さ5.5m、幅は北部で40cm、中央部で50cm、南端では30～50cmのゆるやかなV字断面をもつ溝状遺構となる。

写真27

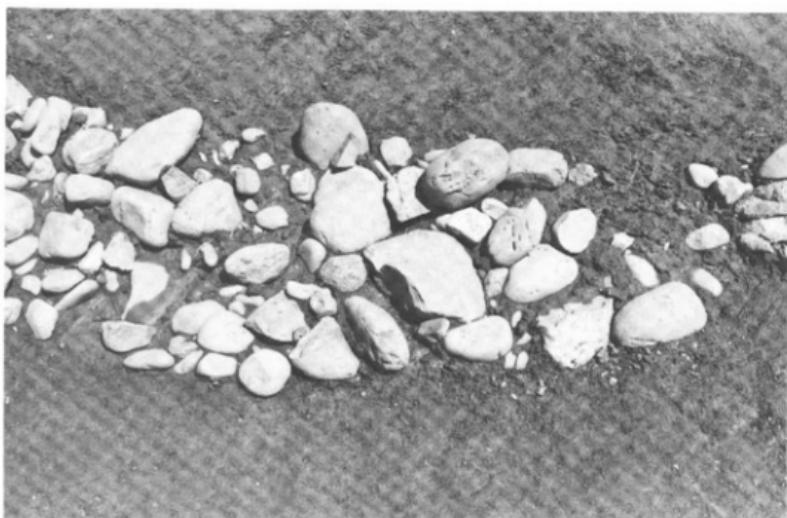


写真28



図6・7・8 写真29

発掘区のほぼ中央部で検出した2つの石群である(SX-04)。北側は約0.6mにわたって径10~15cmの大河原石がまばらに散在する部分である。一列の石を除去すれば、石群のない地の平坦部レベルと同レベルとなる。

写真29

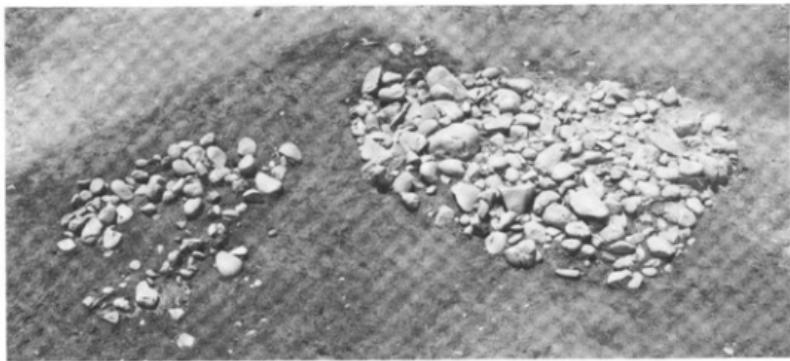


写真30



図6・7 写真30

その南に接して約1.5m²にわたる範囲の石群である。すべて河原石であるが石群中に数個の大石が混在する。石を除去しての完掘状態は長径1.5m、短径1.2m、深さ20cmの卵形の土壤状遺構となる。底面は多少の起伏がある。

図6・7 写真31

発掘区中央部に所在する円形の石群で、直径3.5m、面積9.6m²と最大規模のものである(SX-05)。すべて河原石で、他の石群同様に黒茶褐色砂質土と混在する。この混在層は深さ20~30cmの厚さで検出され、それ以下は親指大の石と黒茶褐色砂質土の混合層に変化し底部に至る。

完掘状態は、直径3.5m、深さ40cmの円形土壤状遺構となる。壁のたちあがりはほとんど垂直に近く、その状態はSX-02ときわめて類似ている。底面は比較的平坦である。

円形状の石群を除去する段階で、石群が南に延長された形で検出され、あわせてそれも除去すれば最終的にはSX-08の土壤状遺構に接続した。

写真31

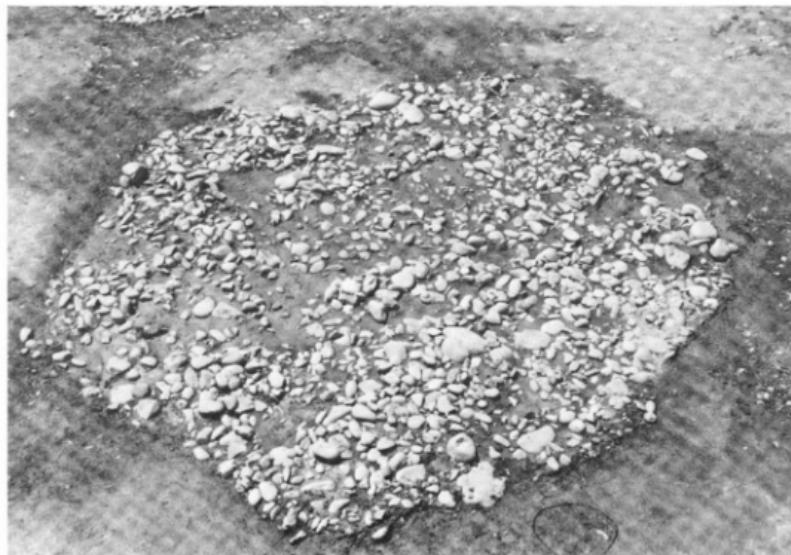


写真32



写真33

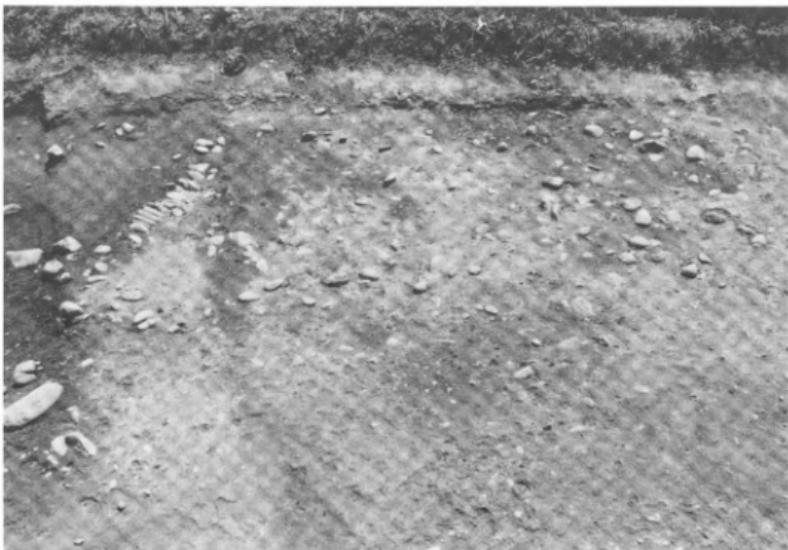


図 6・7 写真32

調査区東端の中央部に散在する石群である (SX-06)。散在範囲は約 9m² にわたるが、他の石群のような密集度は全くない。平面プランは歴然とはしないが、石が混在しやや黒味をおびた土層を除々に排除し発掘すれば 2ヶ所にわたる不整形の土壤状遺構となる。ひとつは径 1.0m、深さ 30cm の円形状で、他は山字形で面積 3.5m² 深さ 45cm で、底面はきわめて起伏に富んでいる。

図 6・7 写真33

発掘区中央部の東端で約 6m² 内に散在する石群である。(SX-07) ただ散在した石群の北端部に長径 20~30cm、短径 10cm 内外の長楕円形の河原石を東西方向に長さ 1.5m にわたって並列した石列を検出した。しかしこの石群も一箇ずつの配列で終り、特別な遺構としてその性格を推考することができるものではなかった。位置的には SX-06 の南に接するものであり、面積的には広いが、SX-05 のような密集度ではなく、石もまばらで北接する SX-06 と類似しておりその延長とも解されよう。平面プランは歴然としないが、石が混在する黒味をおびた土層を除去すると、東端は発掘区外にのび、南壁は 30cm ほど垂直にたちあがる。西面は傾斜をもってゆるやかにたちあがり、北は不整形のままで SX-06 に接続する。底面は比較的平坦である。

図 6・7 写真34

発掘区南端で検出した石群で、ほぼ 9m² のなかに 3ヶ所にわたって集中している (SX-08)。このなかで密集度の濃い石群は径 1.5m のほぼ円形の石群で、その状況は SX-05 に類似している。その東に 2ヶ所にわたって小規模ではあるが散在した石群部分がある。その状態は SX-04 の北石群と類似している。それぞれの石群の石を除去し発掘すると、深さ 45cm 内外で北の SX-05 に接続する。底面は平坦で東壁は傾斜をもち除々に東にむかってたちあがり、SX-07 の西面たちあがり部に接続する。

写真34



写真35





図7 写真35・36

完掘した土壤状造構はSX-02とSX-05が径約3.5m, 深さ約40cm, SX-04とSX-06東土壤が径約1m, 深さ20~30cmとともに円形で類似点が多い。SX-03は石列同様の弧状の溝状造構となる。その他は全く不整形で搅乱崩壊とせざるを得ない。土壤内からの出土遺物も土師質土器, 館前, 古瓦, 近代陶器等の磨耗した細片が散在するのみである。完掘状態や出土遺物から造構の性格は考えがたい。

土壤状造構検出状況

図8 写真37・38・39・40

発掘区の北西部約100m²間に114個の柱穴状ピット群を発掘した。平面プランはすべて円形で、径50cm内外の10数個を除いた他は、平均して20~25cm大のものである。深さは10cm内外のものから30cmほどまでありまちまちである。

写真37

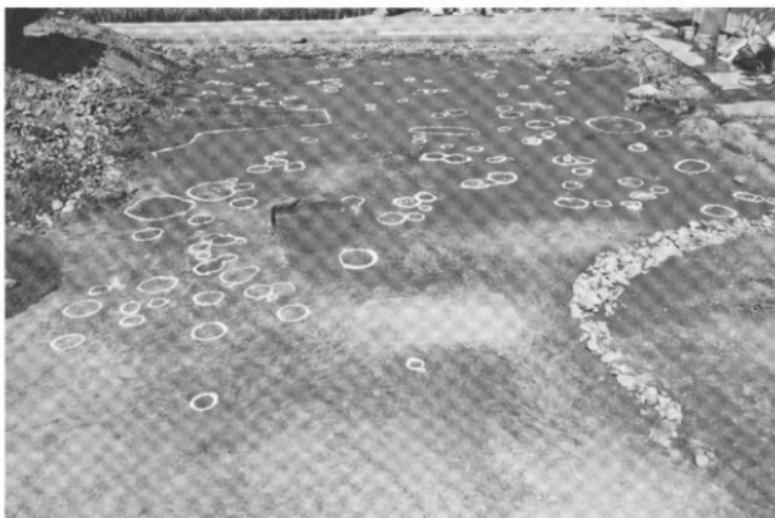


写真38



これらの柱穴には建造物の存在が考えられるわけであるが、その配列・規模等から少な
くとも発掘範囲内では規格性がなく、建造物を想定することは不可能であった。ピット内
からの出土遺物も、須恵器片や土師質土器の磨耗した細片、近代の陶器片など（写真43
・44・45）が混在しており、それぞれの時期の考察は不可能であった。

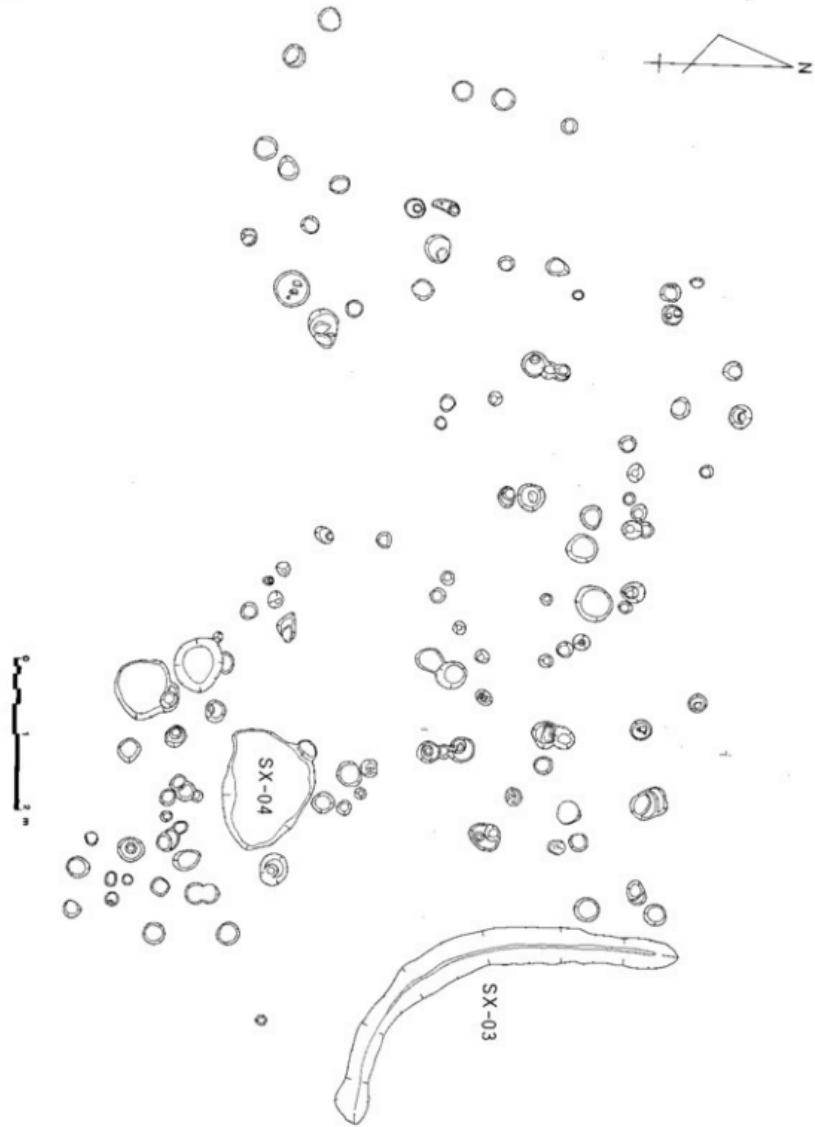
写真39



写真40



図 8



柱穴状ピット及び土壤状遺構完掘状況

写真41

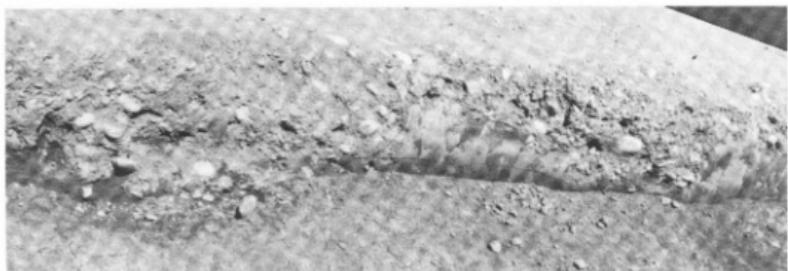


写真42

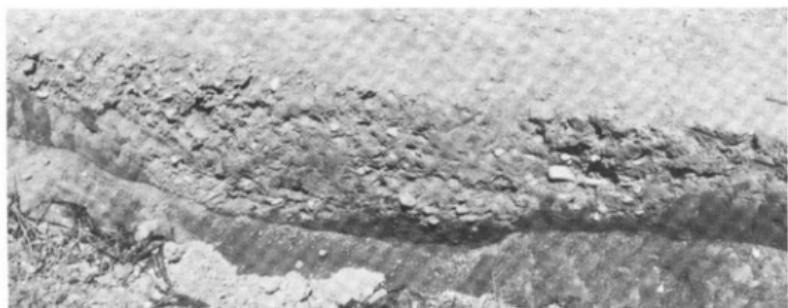


図6・9 写真41・42

調査の最終時において、土壤状遺構の広がりの確認のため2本の試掘溝を設定した。

TR-01は1.5m×9m, 深さ40~70cmのものである。I層をみると内側から外側(内堀)にむかい、除々に浅くなる3ヶ所の土壤状遺構を観察することができる。これらは前述の礫を含む(石群)土壤状遺構と同質のものであり6~7cm大から2~3cm大の大型の礫を多量に含む層である。II層も同様に礫を含むが、礫のサイズは2~3cm大のものばかりとなり、I層に比して量的にもきわめて少いものとなる。III層は全く礫を含まない茶黒色の粘質上層となる。

TR-02は1m×4.5m, 深さ60cmであり、ひとつの大きな土壤状遺構が存在する。層位的には前述の試掘溝と同様である。

これらの試掘溝の観察からしても、発掘区東部から南にかけてはこの種の礫を含む大小さまざまな土壤状遺構の点在することを指摘することができる。

9



試掘トレンド断面図

写真 43



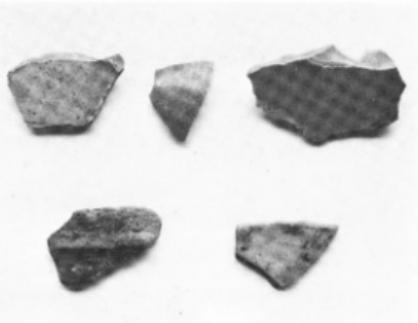
土師質土器片

写真 44



備 前 片

写真45



青磁、瓦質土器片

IV おわりに

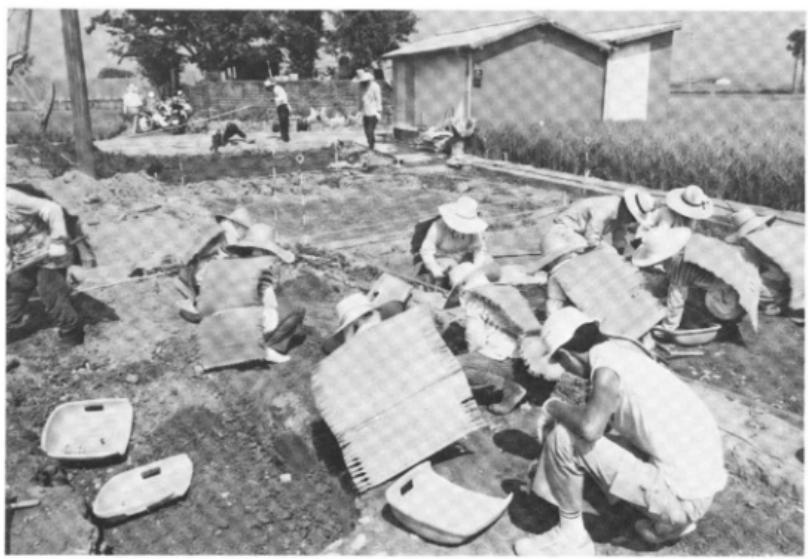
千屋城跡の復原研究は現在まで正確に行われたものはない。長宗我部地検帳や地籍図・ホノギ・現地踏査による地形観察等から若干の推定考察はなされているが説得力は十分でない。考古学的な発掘調査による成果が待たれている時であり、本調査も千屋城跡解明の糸口となるべき成果が期待されたが、結果的には千屋城に関連する遺構と考えられるものの検出はできなかった。遺物もまた土師質土器・備前・青磁・染付など城機能の時期のものと考えられるものは若干採取したが、いづれも細片であり、そのほとんどが攪乱の状態での検出であり決定的なものを確認することは不可能であった。

8ヶ所にわたって検出された石群や土壌状遺構の性格の把握や、また出土遺物からそれらの年代を把握することも不可能であった。高知空港整備拡張に伴う発掘調査、いわゆる田村遺跡群のなかにも、この地区同様性格不明の石群や土壌状遺構が検出されている例があり、それらも含めて今後検討していかなければならない遺構である。

また、おそらく掘立柱建物の柱穴と推定される百余の柱穴状ピット群についても、ピット内からの出土遺物も少量・細片かつ土師質土器から近代陶器に至るものまで含まれ、建物やその時期の考察など全く不可能であった。

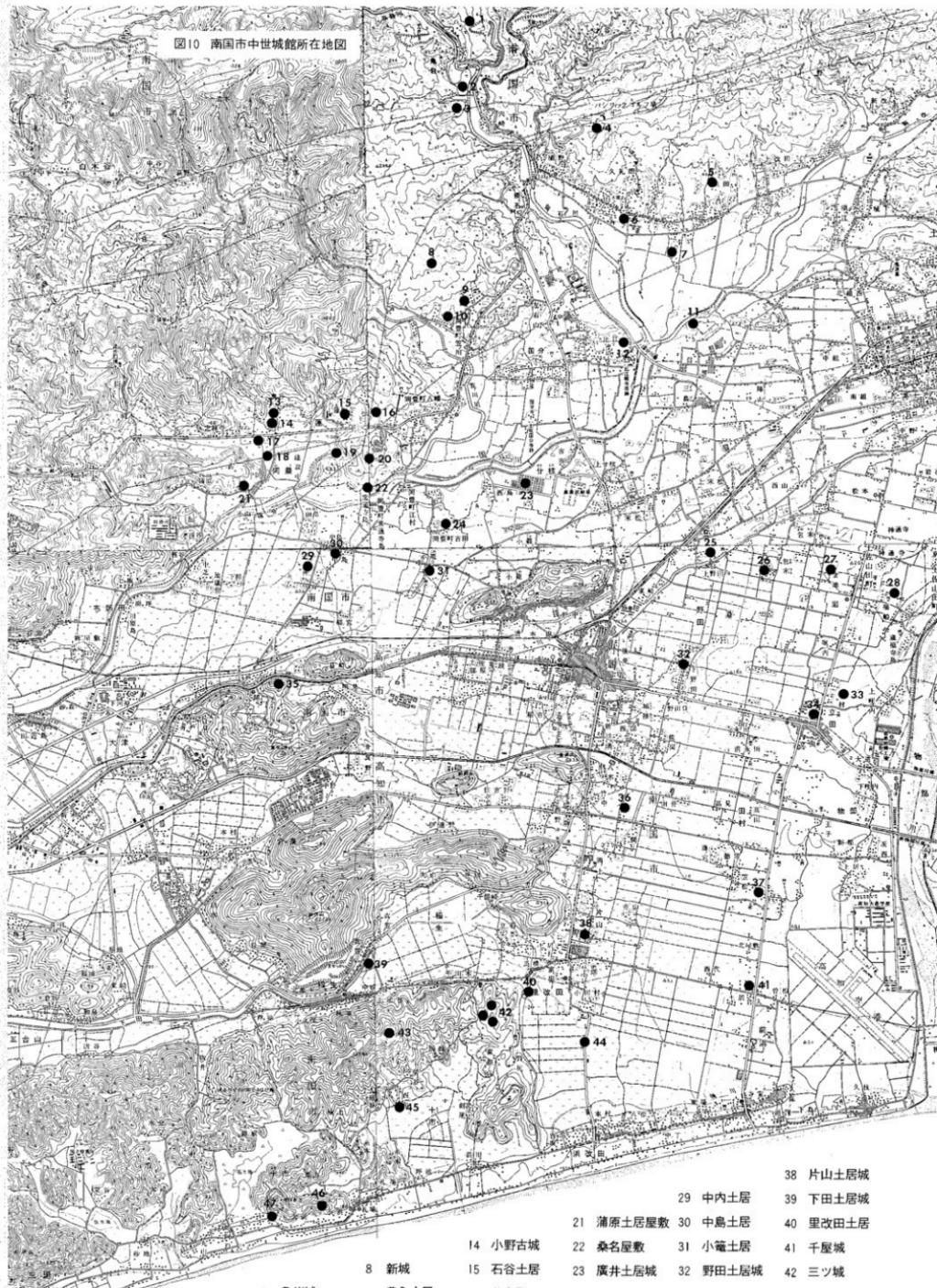
発掘調査地点は、地形上の観察からすれば、内堀内の千屋城詰に相当する地点である。城跡周辺の何らかの遺構の存在は当然考えられる地点である。ただ発掘前の公民館敷地東側の畠地には数基の墓や小祠が存在したことや、口伝によれば、この部分がかつて柿畠・桑畠であったとも云われる。あるいはまた野見嶺南の學習塾跡・邸跡とも伝えられる。これらの前歴からすれば、公民館の建設も含めて今まで相当の攪乱を考えねばならない。出土遺物の状況や、各所の層位の観察からもこの攪乱は判然としている。ただ北西部に集中して検出された柱穴状のピットは掘立柱建造物の柱穴として間違いないものであり、又石群のなかには庭園的な要素も考えられるものもあり、田村遺跡群の関連遺構とともに今後検討をすすめていかねばならないものである。

(宅間一之)



真夏の発掘調査風景

図10 南国市中世城館所在地図



1 亀ヶ森城

2 坂本城

3 龜岩城

4 久礼田城

5 植田土居城

8 新城

9 豊永土居

10 池尻古城

11 三畠城

6 中ノ土居

7 沖ノ土居

12 比江山城

13 小野土居

14 小野古城

15 石谷土居

16 谷土居

17 千傾屋敷

18 塞添屋敷

19 下野土居

20 向豊城

21 蒲原土居屋敷 29 中内土居 38 片山土居城

22 桑名屋敷 30 中島土居 39 下田土居城

23 幢井土居城 31 小篠土居 40 里改田土居

24 吉田土居城 32 野田土居城 41 千屋城

25 上野田土居城 33 立田土居城 42 三ツ城

26 包末土居城 34 德弘土居城 43 鮎森城

27 包地土居城 35 大津城 44 蛭居田土居城

28 岩村土居城 36 八木土居城 45 中ノ城

37 田村土居城 46 栗山城

38 細川土居

千屋城跡

1984. 3. 31

編集・発行 高知県南国市教育委員会

印 刷 近 森 謄 写 堂